■研究発表論文

樹木葬墓地の利用実態と地域にもたらす経済効果

A study on actual use of woodland burial and economic effects on rural areas

上田　裕文*

Hirofumi UEDA

Abstract: This study aimed to grasp the actual use of Satoyama-type woodland burials and their economic effects on rural areas. Questionnaires about user evaluation, visit status and expenditure for visits were sent by post to 2000 members of Chishoin temple and 1200 members of Shinkoji temple. As results, the following status were revealed. (1) There is generally no big difference between their purchase motives and their current evaluation. In particular, the management of Satoyama and changing seasons of nature are highly appreciated. (2) It is getting more difficult to visit far grave because of aging, even though they had not minded it at the beginning. (3) Although the number of grave visits is limited because of long distances, accommodation and wide-area tourism contribute to the expansion of the exchange population in the region. (4) It is estimated that Chishoin has economic effect of 140 million yen and Shinkoji 33 million yen, which has a certain impact on the local economy. Further practical researches that promote local municipalities to establish more Satoyama-type woodland burial cemeteries are needed to conserve the local natural environment and expand the exchange population.

Keywords: *woodland burial, questionnaire, economic effects, rural development*
キーワード：樹木葬，アンケート，経済効果，地域発展

1．研究の背景と目的

少子化の進展などによって人口減少に転じ，家族が先祖代々の墓を維持するという前提が崩れつつある現在，承継者を必要としない散骨や樹木葬といったこれまで法律で定義されていなかった新たな葬送の多様化が見られる[1]。近年は，都市部への人口集中に伴い，「墓じまい」と呼ばれる墓地の改葬および墓地の移転による墓地の都市集中の傾向も強まり，合葬墓や納骨堂，樹木葬墓地など様々な墓地の形態も生み出されている[2]。鎌倉新書が毎年実施している「お墓の消費者全国実態調査」では，2018年以降墓地選択において重視される内容として「お墓の種類」が「アクセス」を上回り，購入金額や自宅からのアクセス以上に，墓地の種類にこだわる人が増えてきている状況を示している[3]。また，実際に選択される墓地の種類についても，2019年に「樹木葬墓地」を選ぶ人が過去最多となり，ついに「一般墓」を上回ったと報告している[4]。

樹木葬墓地は，1999 年に岩手県の知勝院で始まったのをきっかけに全国に普及した。当初は，地元の里山保全を目的とした自然葬の墓地として提案されたものであるが，現在では墓石を樹木に代えただけの，厳密には自然葬には分類されない多様な墓地形態が全国の都市部を中心に樹木葬墓地として提供されている[5]。前述の消費者調査でも，実際に購入された樹木葬墓地の形態は，庭園や公園タイプのいわゆる都市型樹木葬墓地が9割を占める状況である。一方で，当初のいわゆる里山型樹木葬墓地は1割にも満たない。また，自宅から墓地までの所要時間は9割以上が1時間以内であるとのデータは，都市型樹木葬墓地が都市部を中心に供給されている状況を反映している[6]。

このように国内の樹木葬墓地市場が大きく変化する中，都市からのアクセスが不便な地域の自然葬としての里山型樹木葬墓地はどのような人たちにどのように利用され，また評価されているのだろうか。この点が本研究の一つ目の問いである。墓地は他の消費財とは異なり，購入者と利用者が異なることが多く，また利用する年月も世代を超えて長期におよぶ場合が多い。近年は墓地の生前契約が増加し，墓地の購入後，実際に納骨され墓地としての利用が開始されまでに10年以上かかることも珍しくない。日本で樹木葬墓地が誕生してから20年が経過した現在，自然とともに変化を続ける里山型樹木葬墓地の評価や利用実態を明らかにすることで，樹木葬墓地の役割を検証することができる。

樹木葬は本来，承継者を必要としない墓地として，地域の自然環境を活かした新たな手法としてだけでなく，交流人口の拡大などの副次的な効果や，墓地の都市集中を解決する方策としての役割も期待されていた。しかし，こうした側面から行政が樹木葬墓地を地域計画に位置付けることは極めて稀である。自治体が開設する樹木葬墓地は，その埋葬効率から都市型樹木葬を採用するのが一般的であり，未だに里山型樹木葬墓地に取り組む自治体は見られない[7]。そんな中，海外では交流人口拡大による地域の経済効果を期待して，自治体が公営の樹木葬墓地の開設に踏み切るケースが報告されている[8]。国内においても埼玉県越生町では，ふるさと納税と組み合わせて町外の希望者が利用できる公営樹木葬墓地が2019年に開設され，交流人口の拡大が期待されている。果たして，樹木葬墓地による交流人口の拡大と地域への経済効果は本当に期待できるのだろうか。この点が本研究の二つ目の問いである。特に，アクセスが重視される近年の墓地事情において，山間地域に開設される里山型樹木葬墓地はどれほどの経済効果をもたらし得るのであろうか。その実証的なデータによる裏づけを明らかにすることで，今後全国の山間地域の自治体で樹木葬墓地の検討が進み，このことが墓地を介した都市と農村の関係性について再考をもたらすことが期待できる。

先行研究では，社会構造の変化に伴う墓地ニーズを明らかにするため多くの意識調査が行われてきた[9]。それらの研究では，墓地の継承に対する考え方や，希望する葬送，墓地の形態など，新たな墓地埋葬のあり方を模索する研究が中心であり，地域発展に貢献する施設として墓地が地域にもたらす経済効果などに着目した研究は見られない。こうした墓地の意識調査の中で，樹木葬に絞っ

*北海道大学メディア・コミュニケーション研究院

表－1　質問項目

1.性別・年齢	
2.契約の動機と時期（択一選択）	2-1.契約動機（複数選択） 2-2.契約区画と契約時期（複数選択） 2-3樹木葬墓地の選択理由（自由記述）
3.現在の居住地（単一選択）	
4.交通手段と訪問内容	4-1交通手段（複数選択） 4-2訪問回数と人数（自由記述） 見学/納骨/墓参り/その他 4-3.宿泊の有無と宿泊日数（択一選択、自由記述） 4-4.周辺への立ち寄り（択一選択、自由記述）
5.訪問費用の概算（自由記述）	交通費/宿泊費/食事/花・供物/土産/その他
6.満足度	6-1.満足度の5段階評価（択一選択） 6-2.良かった点・困っている点（自由記述）

た調査は多くはないが，井上は岩手県の知勝院において開設後すぐの樹木葬墓地申込者の意識調査を実施し，墓地の脱継承や自然志向の視点から分析を行なっている [10]。しかし，一定の利用期間を経た後の樹木葬墓地の実際の利用実態やその評価を明らかにした研究は見られない。

樹木葬墓地の利用者が地域に与える影響について，金は千葉県の天徳寺において，樹木葬会員の意識調査を里山保全と地域活性化への影響という視点から研究している [11]。しかし，アンケート調査の中に墓参りなどの経費，訪問先，購入品について質問項目を設けているが，詳細な金額についての分析は行われておらず，具体的な経済効果を明らかにするには至っていない。さらに，10年前に行われた調査であることから，最近の樹木葬墓地普及による利用者の意識や地域への影響にはその後変化がある可能性があると考えられる。

近年都市を中心に普及する都市型樹木葬について調査した研究としては，槇村が京都の樹木葬墓地 4 ヶ所の利用者に対しての意識調査を行なっている [12]。こちらは利用者にとっての樹木葬の意味や葬送墓制の意識に加え，空間の位置付けを明らかにしているが，実際の墓参り等の実態や地域への影響は明らかになっていない。また，里山型樹木葬との違いについては考察されていない。本研究の目的は，里山型樹木葬墓地に焦点を絞り，利用者の評価や訪問状況などを含めた利用実態を通して，当初期待されていた交流人口の拡大や，その結果として地域にもたらされる経済効果を明らかにすることである。こうした検証を通じて，都市型化が進む樹木葬に対して新たな評価軸を提供する。

２．研究の方法

（１）調査対象地について

本研究では，樹木葬墓地における利用実態と，地域にもたらす経済効果を明らかにするため，樹木葬墓地の契約者に対してアンケート調査を行った。対象とする樹木葬墓地は，日本で最初に樹木葬墓地を始めた岩手県一関市の知勝院と，その後 2005 年に千葉県で樹木葬を導入した千葉県袖ヶ浦市の真光寺である。いずれも，日本で初期に里山型樹木葬墓地を開始した寺院であり，全国でも数少ない，地域の里山保全を理念として掲げる樹木葬墓地として比較的長い経営実績がある。都市からのアクセスという視点から，山間地域と首都圏に隣接する地域という異なる条件で２箇所の対象地を選択することで，特定の寺院の事例に偏らない多様な利用実態のバリエーションを把握することとした。また，小規模の樹木葬墓地が多い中で，既に契約者数が千人規模となっているため，樹木葬墓地の利用実態を調査するための十分なサンプル数が確保できることからこれらの対象地を選択した。

（２）質問項目について

アンケート調査は両寺院へのヒアリングに基づき質問項目を作成した。その後，両寺院の住職に依頼し，2019 年 12 月にそれぞれの会員向けの会報とともに知勝院 2,000 部，真光寺 1,200 部を郵送にて配布した。その後，2020 年 2 月までの期間で，同封した返信用封筒を用いてアンケートを回収した。

表－2　回答者属性

回答数（%）

		知勝院		真光寺	
性別	男性	228	(33.8%)	105	(37.0%)
	女性	441	(65.4%)	174	(61.3%)
	その他	5	(0.7%)	5	(1.8%)
	計	674	(100.0%)	284	(100.0%)
年齢	40代以下	18	(2.4%)	3	(1.0%)
	50代	53	(7.0%)	17	(5.5%)
	60代	149	(19.7%)	63	(20.4%)
	70代以上	536	(70.9%)	224	(72.5%)
	その他			2	(0.6%)
	計	756	(100.0%)	309	(100.0%)
居住地	市内（一関/袖ケ浦市）	41	(5.4%)	11	(3.6%)
	県内（岩手/千葉県）	71	(9.4%)	153	(50.3%)
	北海道	31	(4.1%)	2	(0.7%)
	東北	173	(22.9%)	7	(2.3%)
	関東	375	(49.5%)	123	(40.5%)
	北陸・中部	51	(6.7%)	7	(2.3%)
	中国・四国	10	(1.3%)	0	(0.0%)
	九州	5	(0.7%)	1	(0.3%)
	計	757	(100.0%)	304	(100.0%)

アンケート調査では，里山型樹木葬墓地の利用実態に基づく評価，利用が地域に与える経済効果を明らかにするため，表－１のような質問項目を用意した。回答者属性として性別，年齢，居住地と契約動機について択一式で質問した。生前契約が多いと予想される樹木葬の性格について，その後の納骨状況も併せて質問することで，現在の利用者の置かれた状況を把握する。

樹木葬墓地の評価については，契約当初の樹木葬の選択理由について自由記述式で尋ねた。そしてアンケートの最後に，現在利用している樹木葬墓地の満足度を 5 段階評価で尋ね，その理由として購入して「良かった点」と「困っている点」をそれぞれ自由記述式で尋ねた。このことによって，契約時の意識とは異なる，樹木葬墓地の利用実態に基づいた，具体的な満足・不満足の理由を含めた評価が明らかになると考えた。

利用実態については，現地への訪問目的ごとの参加人数と過去の累計回数について尋ねた。その際，墓参については年間平均回数で尋ねた。さらに，訪問の際の宿泊の有無や周辺施設への立ち寄り状況についても質問した。樹木葬墓地は生前契約が多いという性質上，埋葬や墓参としての理由に限らない利用が予想される。また自然葬という性格上，季節によって墓地風景が変化することから，事前の見学や契約後の訪問も複数回行われる可能性がある。また，一般の墓地よりも遠方に立地し，樹木葬墓地の風景そのものも魅力となることから，旅行と結びついた訪問なども予想され，さらには樹木葬墓地の里山保全活動などの多様なイベントへの参加状況なども合わせて把握することとした。

地域への経済効果を明らかにするため，交通費や宿泊費，食事やお花代，土産代などの項目に分けて 1 回あたりの訪問費用を尋ねた。実際には，毎回の訪問の人数も異なり，移動手段や滞在時間も目的に応じて異なると考えられるが，回答者の負担を考え，項目ごとに合計人数による総額を平均値の概算として尋ねることとした。

３．結果

回答総数は，知勝院では 772 人（回収率 38.6%）で，そのうち有効回答は 764 人であった。真光寺では 314 人（回収率 26.1%）で有効回答は 311 人だった。

（１）回答者属性

１）性別，年齢

表－2 の通り，回答者は知勝院で男女それぞれ 33.8%，65.4%，真光寺では 37.0%，女性 61.3%とどちらの樹木葬墓地においても女性の回答者の方が多かった。このことは金，槇村の樹木葬墓地

表－3　購入動機

回答数(%)

	知勝院(n=708)		真光寺(n=240)	
未納骨	317	(44.8%)	128	(53.3%)
1骨	274	(38.7%)	74	(30.8%)
2骨	77	(10.9%)	25	(10.4%)
3骨	17	(2.4%)	7	(2.9%)
4骨以上	23	(5.4%)	6	(2.5%)

表－4　納骨状況

回答数(%)

	知勝院(n=761)		真光寺(n=311)	
近親者死亡に伴う埋葬のため	245	(32.2%)	60	(19.3%)
自身・家族のための生前購入	505	(66.4%)	259	(83.3%)
墓じまいに伴う改葬のため	51	(6.7%)	23	(7.4%)
その他	4	(0.5%)	0	(0%)

表－5　樹木葬墓地の選択理由

回答数(%)

	知勝院(n=718)		真光寺(n=293)	
里山保全に共鳴、自然の中で眠りたい	405	(56.8%)	179	(61.1%)
跡継ぎいない、迷惑をかけないため	270	(37.9%)	127	(43.3%)
新聞・テレビ・雑誌・説明会で知って	99	(13.9%)	10	(3.4%)
故人の希望・遺言	81	(11.4%)	22	(7.5%)
重い墓石使わない、従来の墓はいや	66	(9.3%)	32	(10.9%)
現在・従来の寺や墓の在り方に疑問	36	(5.0%)	10	(3.4%)
宗教を問わない	24	(3.4%)	0	(0%)
本人・故人のふるさと	25	(3.5%)	6	(2.0%)
知人からの紹介	19	(2.7%)	2	(0.7%)
墓じまいに伴い	14	(2.0%)	7	(2.4%)
姑、夫、先祖と一緒に入りたくない	13	(1.8%)	4	(1.4%)
正直・誠実・親切と思い	8	(1.1%)	0	(0%)
価格	7	(1.0%)	3	(1.0%)
掃除などの管理が不要	6	(0.8%)	3	(1.0%)
ペットとともに(近くで)に眠れる	3	(0.4%)	30	(10.2%)
がん・余命宣告うけ決めた	2	(0.3%)	0	(0%)

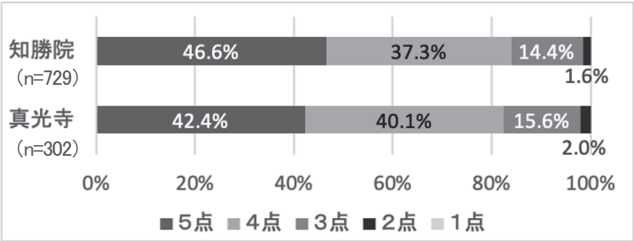
の先行研究と同じ傾向である。年齢は両寺院で 70 歳代以上がそれぞれ70.9%, 72.5%と，ほとんどの回答者が70代以上であった。金や槇村の先行研究に比べると本調査の回答者は圧倒的に 70 代以上が多いという特徴が見られた。このことは，両寺院の開設時期が早いことから，樹木葬墓地の生前契約者たち，または配偶者を中心とする遺族も高齢化している傾向を表しているという見方もできる。このように，両寺院の樹木葬墓地における実質管理者は70歳以上の女性が多くを占めている。

2）契約者の居住地

知勝院の契約者は東京を中心とした関東が 49.5%を占めた。そして，仙台を中心とした岩手県を除く東北が 22.9%，地元岩手県が9.4%である。その他北海道 4.1%，九州 0.7%と全国にまで会員が広がっている。知勝院は岩手県一関市の山間地域にあるが，日本で初めて樹木葬墓地を開設し，数年間他に競合施設の存在がなかったことと，同寺の熱心な普及活動によって日本中から契約者を集めることとなったと考えられる。真光寺は千葉県袖ケ浦市にあり，首都圏からのアクセスが良く，千葉県を除く関東が 40.5%，地元千葉県が50.3%と関東圏のみで9割以上の会員となっている。両寺院とも，全国でも数少ない自然葬としての里山型樹木葬を求める首都圏および全国の人々の選択先となっていることがわかる。

3）購入動機（複数回答）

表－3 の通り，「自身・家族のための生前予約」が過半を占めているのは，樹木葬墓地の特徴である（知勝院 66.4%・真光寺 83.3%）。別の質問項目で納骨数について尋ねたが，実際「未納骨」との回答は知勝院で 44.8%，真光寺で 53.3%と約半数であった（表－4）。「近親者死亡に伴う埋葬のため」との回答は，知勝院 32.2%，真光寺 19.3%と，13 ポイントの差がでた。知勝院には全国初の樹木葬墓地として，自然葬を希望した故人の遺骨が全国から集まった特徴を表していると考えられる。「墓じまいに伴う改葬のため」と



図－1　樹木葬墓地の満足度評価

表－6　良かった点

回答数(%)

良かった点	知勝院(n=619)		真光寺(n=250)	
自然豊かでいつもきれいに管理されている	178	(28.8%)	65	(26.0%)
自然の中で季節を感じ眠れる	170	(27.5%)	61	(24.4%)
終の心配がなく安心し旅立てる	102	(16.5%)	61	(24.4%)
跡取りに迷惑かけず樹木葬は安心できる	42	(6.8%)	30	(12.0%)
宗教、しがらみに縛られず自由	38	(6.1%)	10	(4.0%)
里山訪問も楽しい	34	(5.5%)	5	(2.0%)
故人の希望をかなえられよかった	31	(5.0%)	5	(2.0%)
通信誌も楽しい	29	(4.7%)	2	(0.8%)
親切・誠実・たのしい　住職に相談できる	27	(4.4%)	22	(8.8%)
価格的にリーズナブル,収支はっきりしている	25	(4.0%)	11	(4.4%)
樹木が生前に利用できる	24	(3.9%)	7	(2.8%)
研修会に参加、墓ともできた	17	(2.7%)	2	(0.8%)
気軽に訪問できる	16	(2.6%)	15	(6.0%)
行事のある時迎えのバスがある	10	(1.6%)	1	(0.4%)
ペットも近くに埋葬してくれる	5	(0.8%)	15	(6.0%)
隣県・近隣で行きやすい	5	(0.8%)	7	(2.8%)

表－7　困っている点

回答数(%)

困っている点	知勝院(n=451)		真光寺(n=180)	
特にない	114	(24.9%)	59	(31.9%)
遠い、交通不便、年齢とともに行きづらくなる	282	(61.6%)	98	(53.0%)
周りの理解なく説明に苦慮	13	(2.8%)	1	(0.5%)
訪問費用かさむ、訪問回数制約される	8	(1.7%)	4	(2.2%)
はっきりした区画なく一抹の不安	6	(1.3%)	5	(2.7%)
植樹している木が全然育たない	6	(1.3%)	0	(0.0%)
道が狭い、坂が急でつらい	3	(0.7%)	3	(1.6%)
その他	26	(5.8%)	15	(8.3%)

の回答は，両寺院とも 7%前後であった。この数字は，前述の鎌倉新書によるお墓の消費者調査結果に見られる 13.8%と比べると低い値である。このことは，自然葬としての里山型樹木葬墓地が墓じまいによる遺骨の安易な受け入れ先としては機能していないことを示唆している。

4）契約時の樹木葬墓地の選択理由（自由記述）

表－5 の通り，自由記述式で回答された契約時に樹木葬墓地を選択した理由は，その記述内容が 16 通りに分類できた。複数の内容を含んだ回答については，それぞれの分類項目に分けて回答をまとめ，複数回答のように集計した。その結果，「里山保全に共鳴，豊かな自然の中で眠りたい」との回答が一番多く（56.8%，61.1%）。次に，「跡継ぎがいない，いても迷惑かけたくない」が 37.9%，43.3%であった。「重い墓石は嫌，従来の墓や寺に疑問」といった回答も 9.3%，10.9%見られた。特徴的なのは，真光寺で 10.2%が「ペットとともに眠れるから」と答えており，現在この項目が墓選びのトレンドの一つとなっている。

このような「脱継承」「自然志向」の二つの傾向は，樹木葬墓地の選択理由として金や槇村の先行研究でも共通して報告されている。別の言い方をすると，都市型樹木葬も同じ理由で選択されるということである。しかし，槇村の京都の樹木葬での調査では，「全国の 150 ヶ所以上ある樹木葬墓地の中で，その樹木葬墓地を選択した理由」も併せて尋ねており，「お寺が管理してくれるので安心だから」（60.4%）「永代供養してもらえるから」（58.6%）の他に，「自分の住んでいる地域の近くにある，もしくはアクセスが良いから」（30.8%）といった回答が得られている。近くにあることやアクセスの良さが，都市型樹木葬では通常の墓選び同様に

表－8　交通手段

回答数(%)

	知勝院(n=757)		真光寺(n=305)	
自家用車	392	(51.8%)	203	(66.6%)
(自家用車のみ)	(249)	(32.9%)	(151)	(49.5%)
徒歩	19	(2.5%)	15	(4.9%)
バス	184	(24.3%)	84	(27.5%)
電車	456	(60.2%)	116	(38.0%)
タクシー	262	(34.6%)	22	(7.2%)
飛行機	43	(5.7%)	3	(1.0%)

表－9　訪問目的と回数・人数

訪問目的		知勝院	真光寺
見学	平均回数	1.73回 (n=595)	1.97回 (n=259)
(累計)	平均人数	2.39人 (n=595)	2.37人 (n=248)
納骨	平均回数	1.4回 (n=345)	1.6回 (n=101)
(累計)	平均人数	5.6人 (n=342)	7.0人 (n=100)
墓参	平均回数	2.53回 (n=388)	5.19回 (n=128)
(1年あた	平均人数	2.83人 (n=386)	3.15人 (n=123)
その他	平均回数	3.49回 (n=190)	3.21回 (n=107)
(累計)	平均人数	2.89人 (n=198)	2.53人 (n=107)

表－10　「その他」の訪問目的

回答数(%)

	知勝院(n=155)		真光寺(n=89)	
帰省によるお参り	9	(5.8%)	0	(0.0%)
寺院行事、研修会	64	(41.3%)	50	(56.2%)
親類・知人が見学	39	(25.2%)	24	(27.0%)
旅行を兼ねた確認	41	(26.5%)	15	(16.9%)
ペット納骨のため	2	(1.3%)	0	(0.0%)

重要な要素となるが，本調査の里山型樹木葬ではむしろ「本人・故人のふるさと」という理由が回答されている点は注目に値する。

（４）利用者の満足度評価について

図－1 の通り，現在の満足度を 5 段階評価で聞いた結果，5 点満点とした回答者は知勝院で 46.6%，真光寺が 42.2%と過半に迫っている。4 点を含めれば知勝院 83.9%，真光寺 82.5%に及ぶ。その理由について「購入してよかった点」，「困っている点」で得られた自由記述の意見から読み取ることができる。

表－6 の通り，「購入してよかった点」の記述内容は 16 通りに分類でき，複数の内容を含む場合はそれぞれの項目でまとめた。その結果，契約時の選択理由（表－5）とほとんどが一致していた。一定の利用期間を経て，新たに評価されるようになった点は，「自然豊かでいつでもきれいに管理されている」が知勝院 23.6%，真光寺 20.4%，「自然の中で季節を感じながら眠れる」が知勝院 22.6%，真光寺 19.1%と実際の管理状況や季節変化といった側面であることがわかる。その他，「樹木の成長を生前から見られる」（3.9%，2.8%）というのは，生前契約が可能で，個別埋葬が行われる里山型樹木葬に特徴的な意見といえる。

樹木葬墓地の多様な利用形態と関連して，「気軽に訪問できる」「里山訪問が楽しい」「研修会の参加，友達もでき楽しい」といった，墓地としてだけでない訪問動機についての意見が見られた。一般的にはアクセス条件が悪いとされる里山型樹木葬墓地であるが，近隣地域の居住者にとっては，容易なアクセスがメリットとなり，遠方からの利用者にとっても送迎バスサービスが評価されている。

一方で表－7 の通り，契約時には見えておらず，実際の利用を通して「困っている点」としては「特にない」との回答が目立ったが（24.9%，31.9%），実質的には両寺院で共通して「遠い，交通が不便」という意見が最も多い（61.6%，53.0%）。「道が狭い，坂が急で辛い」という意見と合わせて，年齢とともに訪問しづらくなる不安が見て取れる。また，「訪問費用がかさむ，訪問回数が制限される」という意見や，「周りの理解なく説明に苦慮」（2.8%）は，里山型樹木葬墓地における継続的な利用への不安を物語っている。

（２）訪問状況

１）交通手段（複数回答）

表－8 の通り，樹木葬墓地への交通手段について，知勝院は遠隔からの訪問のため電車とバス・タクシーなどの組み合わせが多い（60.0%）。一方真光寺は関東一円からの来苑がほとんどを占めるため，他の交通手段と組み合わせない自家用車のみの利用が 49.5%で最も多かった。

２）訪問目的と回数・人数

樹木葬墓地の利用実態という視点から，様々な理由からの樹木葬墓地の訪問の様子を捉える必要があると考えられる。そこで，樹木葬訪問の目的と参加人数，回数などについて尋ねた。

表－9 の通り，樹木葬墓地の現地見学には両寺院で 2 回以上訪れている人が多く（40%，64.5%）参加人数は 2 人以上が多い（82.5%，85.9%）。アンケート回答者のほとんど（知勝院で 766 人中 595 人，真光寺で 314 人中 259 人）が見学で訪れたと回答しているが，無回答については当時の契約者が亡くなり，遺族が利用者となっている場合が含まれると考えられる。

納骨については，前述の通り，生前契約も多く未納骨の利用者が約半数いる。納骨済みの回答者のうち，複数回の納骨を行った人が 23.8%，21.8%いて，その際の参加人数は平均で 5.6 人，7.0 人であった。都心部から近い真光寺の方が，納骨の際の参加者が多いことがわかる。

墓参については，どちらの寺院でも年に 1 回以上訪れると回答した人がそれぞれ 50.8%と 41.2%で，平均回数はそれぞれ，2.53 回，5.19 回であった。真光寺の方が 2 倍以上の回数であることがわかる。同様に，その際墓参に訪れる人数の平均は，2.83 人と 3.15 人である。

上記以外，その他の理由で過去に現地を訪れた回数についても尋ねたところ，それぞれ 24.9%，34.4%で 1 回以上の訪問経験があった。今回調査対象とした知勝院，真光寺では樹木葬会員に向けて様々な行事や研修会などを開催している。表－10 の通り，その他の訪問理由はこうした里山保全活動と関連した行事や研修会への参加が最も多く，それぞれ内訳の 41.3%と 56.2%を占めている。続く理由としては，知勝院では「旅行を兼ねた確認」が 26.5%で，真光寺では「子や孫などの親類や友人の見学」が 27.0%を占めている。こうした，旅行を兼ねた立ち寄りや，墓地を人に案内するといった訪問というのは一般墓地とは異なる里山型樹木葬墓地に特徴的な回答であると思われる。

３）訪問時の宿泊や立ち寄り

訪問時の宿泊の有無について尋ねたところ，表－11 の通り知勝院では，宿泊率が 58.8%で二泊以上の宿泊も見られた。真光寺は，関東圏から自家用車日帰りがほとんど（94.1%）であった。また，表－12 の通り知勝院は 8 割以上の立ち寄りがあるのに対し，真光寺では 4 割弱であった。共通して回答される飲食店や道の駅以外にも，両地域で温泉地や自然景勝地，観光施設やアウトレットモールを含む周辺観光地への広域移動があることがわかる。このように，従来の墓地利用以外の里山訪問や家族旅行といった形で樹木葬墓地を訪れている様子が見て取れる。

（３）訪問費用について

墓参等で訪れる際の一回あたりの訪問費用について尋ねた。両寺院 1 回あたり訪問費用(訪問人数総額）は表－13 の通りである。いずれも，訪問人数の総額について，毎回の訪問でかかる料金の平均値を概算で回答してもらっているため，その内訳が詳細にわかるわけではない。しかし，前述の回答内容と組み合わせるこ

表－11　宿泊の有無

回答数（%）

	知勝院（n=738）		真光寺（n=306）	
日帰り	304	(41.2%)	287	(94.1%)
宿泊あり	434	(58.8%)	18	(5.9%)
1泊	288	(39.0%)	17	(5.6%)
2泊	111	(15.0%)	0	(0.0%)
3泊	23	(3.1%)	0	(0.0%)
4泊以上	12	(1.6%)	1	(0.3%)

表－12　立ち寄りの有無

回答数（%）

知勝院（n=724）			真光寺（n=301）		
立ち寄りなし	134	(18.5%)	立ち寄りなし	184	(61.1%)
立ち寄りあり	590	(81.5%)	立ち寄りあり	117	(38.9%)
厳美渓・猊鼻渓	216	(41.6%)	そば・餅店・レストラン	53	(46.9%)
中尊寺（平泉）	193	(37.2%)	東京ドイツ村	36	(31.9%)
そば・餅店・レストラン	191	(36.8%)	アウトレット・海ほたる	23	(20.4%)
道の駅	96	(18.5%)	道の駅	21	(18.6%)
県内温泉	58	(11.2%)	鴨川シ-ワ-ルド	4	(3.5%)
栗駒山・須川温泉	48	(9.2%)	県内温泉	2	(1.8%)
県外温泉	15	(2.9%)	御宿	2	(1.8%)
仙台	14	(2.7%)	成田新勝寺	2	(1.8%)
松島	10	(1.9%)	その他	5	(4.4%)
気仙沼	10	(1.9%)			
宮沢賢治記念館	9	(1.7%)			
博物館	7	(1.3%)			
その他	18	(3.5%)			

とで，解釈可能なものが多く含まれる。

交通費は，基本的には全ての利用者に必要な費用である。自家用車利用が多い真光寺において低く抑えられていることがわかる。一方，新幹線や飛行機を使っての移動となる知勝院では，全体として高額な交通費がかかっている。

宿泊代は，宿泊の多い知勝院にて回答者も多く，総額も高くなっている。立ち寄り状況の結果と照らし合わせると，周辺観光と合わせて宿泊日数がのびたり，温泉宿に宿泊して宿泊単価が高くなったりしていると解釈することができる。このことは，食事代についても同様のことが言えるが，宿泊と比べると，回答者の半数以上が食事を伴っていることがわかる。ただ，周辺地への立ち寄りに関する回答数の方が少ないことから，真光寺では地域外で食事をするケースも多いことが推察される。

花・供物代については対象地での違いは見られず，5 千円前後が支払われていることがわかる。一方でお土産について，回答数も支出額もともに知勝院の方が 2 倍近くであるが，遠方で周辺地域への立ち寄り旅行との組み合わせによるものであると推察される。

4．考察

（1）樹木葬墓地の利用実態と評価について

自然葬へのニーズを満たす樹木葬墓地として，当初の選択理由と現在の評価の結果が一致していることから，利用者にとって当初の期待通りの高い満足感が得られていることが伺えた。槇村は，都市型樹木葬では，自然そのものよりも自然イメージが消費されていると指摘するが，今回調査を行なった里山型樹木葬墓地ではどうだろうか。一定の時間が経つことによって，自然豊かできれいに管理されている点が現在の評価で最も多く回答されていた点，墓参以外にも，自然環境の四季の移ろいなどを観察するために現地を訪問している利用実態に，自然のイメージではなく，現実の自然環境に対する評価が現れていると見ることもできる。実際の墓参回数は，年間 1 回以上と答えた回答者が 5 割前後と一般的な墓地の調査結果が示す約 8 割に比べて少ない[13]。しかし，生前契約を結んだ利用者には，墓参のみならず寺院の行事に参加したり，知人を案内したりといった異なる目的の訪問が見られた。また，近隣の観光地を訪れるなどの広域観光と組み合わせた訪問形態も

表－13　訪問費用

回答数（%）

		知勝院		真光寺	
交通費	n	699		273	
	総額	30,739,500円		1,882,200円	
	平均	43,976円		6,895円	
	20万円～	15	(2.1%)	0	(0.0%)
	10万～20万円	46	(6.6%)	2	(0.7%)
	5万～10万円	193	(27.6%)	3	(1.1%)
	3万～5万円	149	(21.3%)	2	(0.7%)
	1万～3万円	160	(22.9%)	52	(19.0%)
	～1万円	136	(19.5%)	214	(78.4%)
宿泊代		回答380 総額14,770,500円 平均38,870円		回答18件 総額516,000円 平均28,667円	
	20万円～	8	(2.1%)		
	10万～20万円	18	(4.7%)	1	(5.6%)
	5万～10万円	69	(18.2%)	1	(5.6%)
	3万～5万円	116	(30.5%)	5	(27.8%)
	1万～3万円	150	(39.5%)	7	(38.9%)
	～1万円	19	(5.0%)	4	(22.2%)
食事代		回答493 総額5,166,700円 平均10,480円		回答156 総額1,097,200円 平均7,033円	
	10万円～	1	(0.2%)	1	(0.6%)
	5万～10万円	14	(2.8%)	2	(1.3%)
	3万～5万円	22	(4.5%)	3	(1.9%)
	1万～3万円	187	(37.9%)	22	(14.1%)
	0.5万～1万円	105	(21.3%)	33	(21.2%)
	～0.5万円	164	(33.3%)	95	(60.9%)
花・供物・線香代		回答316 総額1,548,700円 平均4,901円		回答112 総額644,200円 平均5,[illegible]構成比	
	5万円～	2	(0.6%)	2	(1.8%)
	3万～5万円	5	(1.6%)	1	(0.9%)
	1万～3万円	42	(13.3%)	15	(13.4%)
	0.5万～1万円	65	(20.6%)	20	(17.9%)
	～0.5万円	202	(63.9%)	74	(66.1%)
お土産代		回答285 総額2,269,200円 平均7,962円		回答49 総額200,500円 平均4,092円	
	3万円～	17	(6.0%)	0	(0.0%)
	1万～3万円	68	(23.9%)	3	(6.1%)
	0.5万～1万円	79	(27.7%)	14	(28.6%)
	～0.5万円	121	(42.5%)	32	(65.3%)
その他		回答99 総額1,528,700円 平均15,441円		回答50 総額383,000円 平均7,660円	
	10万円～	3	(3.0%)	1	(2.0%)
	5万～10万円	3	(3.0%)	0	(0.0%)
	3万～5万円	10	(10.1%)	1	(2.0%)
	1万～3万円	39	(39.4%)	9	(18.0%)
	0.5万～1万円	24	(24.2%)	18	(36.0%)
	～0.5万円	20	(20.2%)	21	(42.0%)

確認することができた。

一方で，契約当初はあまり意識されなかったアクセスの悪さについては，次第に意識されるようになっている。当初は，本人または家族のために生前契約が行われた墓地が多くを占めていたが，その後時間が経つにつれ本人が高齢化したり，本人が死亡して残された遺族，特に配偶者が高齢化したり，次の世代の遺族が異なる価値観を持っていたりといった変化が，将来の継続的な利用への不安として現れ始めている。遺族の高齢化は，利用形態にも現れている。交通手段として自家用車利用が多いが，今後の遺族の高齢化によってはさらに変化していくことも予想される。評価の中で，バス送迎サービスが挙げられているように，さらに高齢化が進むと公共の交通機関にて訪問する遺族が増えると予想される。また，子や孫といった親戚を伴った訪問が増え，それらが宿泊を伴う周辺観光と結びつくきっかけとなっている可能性もある。このように，新規墓地購入の 9 割が 1 時間圏内の立地とされる墓地

市場において，こうした比較的遠方にある里山型樹木葬は，一般的な墓地とは一線を画す利用実態が見られ，評価されていることが確認できた。

（2）地域への経済効果について

ここでは，便宜的に表－13 の値を用い，利用者の観光消費額を通して地域への経済効果について考察を行う。表－11，表－12 の結果から，回答者の消費行動を宿泊の有無と周辺立ち寄りの有無を基準に三つのグループに分ける。具体的には，宿泊し周辺に立ち寄る「宿泊旅行者」，日帰りで周辺に立ち寄る「日帰り旅行者」，日帰りで周辺に立ち寄らない「日帰り墓参者」の 3 グループである。「宿泊旅行者」は「宿泊あり」の回答数（知勝院 434 人，真光寺 18 人），「日帰り旅行者」は，「立ち寄りあり」の回答数から「宿泊あり」を引いた回答数（知勝院 156 人，真光寺 99 人），「日帰り墓参者」は，「立ち寄りなし」の回答数（知勝院 134 人，真光寺 184 人）を用いて，この三つの消費行動グループの人数比率とすることとした。今回は地域への経済効果に着目するため，表－13 の観光消費項目における「交通費」と「花・供物代」といった地域外に投下される項目を計算から除外することとした。そして，「宿泊旅行者」は「宿泊代」「食事代」「お土産代」「その他」の項目を地域内での消費額として合算し，「日帰り旅行者」はそこから「宿泊費」を除く項目の平均値を合算，「日帰り墓参者」はさらに「お土産代」の項目の消費額も除外して，各項目の平均値を合計した（表－14）。その結果，「宿泊旅行者」は一回の訪問での地域に投下する金額が知勝院で約 8 万円，真光寺で約 5 万円となった。同様に，「日帰り旅行者」は約 3 万円と約 1.5 万円，「日帰り墓参者」は約 1.5 万円と約 8 千円となった。

この値を用いて，両樹木葬墓地への年間の墓参りが地域に与える経済効果を推定する。それぞれの会員数（2000 人，1200 人）を三つの消費行動グループの比率に分けたうえで，それぞれのグループの地域に投下される金額の総額を合算し，さらに年間平均墓参回数である知勝院 1.28 回，真光寺 2.14 回を乗じた[14]。その結果，毎年の墓参りが地域に与える経済効果を，知勝院で約 1.4 億円，真光寺で約 3 千 3 百万円と推定することができた。実際には，利用実態として明らかになった墓参り以外の現地訪問があるため，さらに多くの経済効果を与えていると考えられる。平成 28 年経済センサスによると，「宿泊業，飲食サービス業」の年間売上額は，一関市で 143 億円，袖ヶ浦市で 66 億円である[15]。そのため，一箇所の樹木葬墓地で毎年の墓参りが地域に与える経済効果は，一関市においてはおよそ 1%，袖ケ浦市ではおよそ 0.5%に値する計算になる。このことから，里山型樹木葬墓地が交流人口の拡大と地域への経済効果という視点から一定の役割を担っていることが明らかになった。

5．結論

本研究では，近年全国で都市化が進んでいる樹木葬に対して，導入当初から 20 年が経過し，自然とともに変化を続けている里山型樹木葬の現状を検証した。日本で最初に樹木葬を開始した岩手県の知勝院と，千葉県の真光寺の里山型樹木葬墓地の会員を対象にアンケート調査を実施し，樹木葬墓地の利用実態とそれに基づく評価，地域への経済効果について明らかにした。新たに得られた主な知見は以下の通りである。

- 樹木葬墓地が開設されて 15～20 年が経っているが，概ね会員にとっての契約当時の選択理由と，現在の評価の間には大きなずれはなく満足度は高い。その中でも，里山の管理や自然の樹木の成長や四季の移ろいへの理解は，実際の利用を通して新たに評価されるようになったものであり，この点が一般の墓地や都市型樹木葬墓地との大きな違いである。
- 契約者自身または遺族の高齢化に伴い，遠方の墓地に通うことの負担が認識されている。それにより，将来にわたる継続的利用への不安も生じている。
- 遠方のため墓参の回数自体は少ないが，宿泊や広域観光を兼ねた訪問が中心となっていて，地域の交流人口の拡大に貢献している。
- 観光消費額に基づいて，樹木葬墓地への訪問によって地域に与える経済効果を推定した。最も訪問回数の多い墓参りについては，知勝院で年間 1.4 億円，真光寺で 3 千 3 百万円の経済効果をもたらしていることが推計され，地域経済に一定の影響を与えていることが確認できた。

以上のように，アクセス重視での墓地選択が行われ，墓地の都市集中が加速する樹木葬市場にあっても，地域の自然環境を生かした里山型樹木葬墓地のニーズは一定数あり，地域への経済効果も期待できることが示された。近年，自治体による公営墓地は埋葬効率の高い都市型樹木葬を志向する傾向がある。本研究から得られた知見を生かして，農村に立地する自治体が里山型樹木葬を整備し，地域の自然環境保全や交流人口拡大を進めることができるよう，より具体的な方策を導く実践研究が求められる。

表－14　観光消費による地域への経済効果

円

	知勝院(n=724)			真光寺(n=301)		
	宿泊旅行者	日帰り旅行者	日帰り墓参者	宿泊旅行者	日帰り旅行者	日帰り墓参者
n	434	156	134	18	99	184
宿泊代	38,870			28,667		
食事代	13,381	4,659		12,377	3,602	
お土産代	7,962	7,962		4,092	4,092	
その他	15,441	15,441	15,441	7,660	7,660	7,660
計	75,654	28,062	15,441	52,796	15,354	7,660

謝辞：本研究は，科学研究費補助金（基盤研究 C#18K05700）「新たな森林利用としての樹木葬墓地の実効性に関する研究」（研究代表：上田裕文）の一部として行われた。調査にあたって、知勝院，真光寺の住職や樹木葬会員の方々にご協力いただいた。感謝いたします。

補注及び引用文献

1) 槇村久子(2013)：お墓の社会学 －社会が変わるとお墓も変わる：晃洋書房，228pp
2) 森謙二(2000)：墓と葬送の現在 －祖先祭祀から葬送の自由へ：東京堂出版，325pp
3) 鎌倉新書(2019)：「お墓の消費者全国実態調査」から見る，10年間の消費者動向の変化：仏事6月号，28-31
4) 鎌倉新書(2019)：お墓の消費者全国実態調査（2018）霊園・墓地・墓石選びの最新動向，https://guide.e-ohaka.com/research/survey_2018/：2021.2.21更新, 2020.9.10参照
5) 上田裕文(2016)：ドイツの樹木葬墓地に見る新たな森林利用：ランドスケープ研究79(5), 537-540
6) 前掲3
7) 上田裕文(2020)：ドイツと日本の樹木葬墓地の展開：公園緑地80(4), 13-16
8) 上田裕文(2019)：こんな樹木葬で眠りたい：旬報社，117-127
9) 森謙二(2013)：お墓についての意識調査：わが国の葬送墓制の現代的変化に関する実証的研究報告書, 12-13
10) 千坂嶋峰・井上治代(2003)：樹木葬を知る本：三省堂，7-17
11) 金亮希(2009)：樹木葬会員の意識からみた樹木葬墓地の今後の課題：東京大学農学部演習林報告（121), 117-148
12) 槇村久子(2019)：樹木葬墓地の特性と墓制での位置付け～「京都の樹木葬」意識調査から～：京都女子大学宗教・文化研究所研究紀要32，75-97
13) 前掲 9
14) 回答された年間のべ墓参回数の合計を会員数で除し，年間平均墓参回数を算出
15) 総務省統計局(2018)：平成28年経済センサス-活動調査結果

(2020.9.26受付，2021.3.30受理)